

## 論文審査の要旨及び担当者

### 論文題名

日本中世絵画における女性の信仰と表象に関する研究

### 論文審査の要旨

本論文は、女性の信仰を描く中世絵画がいかなる意味を有し、どのような機能を果たしたのかを明らかにすることを目的とし、その成立に女性の関与が考えられる「阿字義絵」（藤田美術館蔵）、「平家納経」（厳島神社蔵）、「当麻曼荼羅縁起絵巻」（光明寺蔵）を主たる対象作品として、テキスト（詞章、経文）と絵画相互の関係を丁寧に読み解き、貴族女性の往生観がどのように投影され各作品を枠づけているのかを論ずる。描かれた女性表現に着目して女性の信仰の様態を考察する本論文は、これらの作品の制作事情の解明を大きく進展させ、新たな議論の道筋を示すに至った。

論文は、序章、第一部（第一章～第三章）、第二部（第四章、第五章）、第三部（第六章～第八章）、終章という十章構成の本文篇と図版篇の二部仕立てである。本文篇には、「平安・鎌倉時代法華経経意絵比較一覧表」「井戸の縁起比較表」などの資料も付され、また図版篇は348図のカラー図版を収録する。以下、内容を略述する。

まず序章に於いて、本論文で扱う「阿字義絵」「平家納経」「当麻曼荼羅縁起絵巻」の三作品に「出家や在俗の女性の仏道の行いや往生・成仏のさまがこまやかに描かれており、絵画と女性の信仰の関係を」「普賢菩薩十羅刹女像」といった尊像画などとは別の面から辿り得る可能性があることを述べ、しかしながらこれらの作品への女性の関与の具体相については検証が進んでおらず、制作事情には未解明の部分が多いことを指摘する。さらに、従来、各作品をとりまく歴史的状況として考慮されてきたのは、主として寺院や僧侶すなわち男性側の視点であったが、当時の社会的・文化的状況を踏まえた貴族女性の信仰生活の傾向と特質を視野に入れることが重要であると、本論文を貫く成原氏の立ち位置を示す。また、各作品研究における問題点をあげ、絵とテキスト（詞書、経文）双方の詳細な検討、いかなる立場の人々が絵の成立に関与したのか、とりわけ女性表現に着目した分析という本論文の方法を述べる。

第一部「阿字義絵」研究は、「阿字義絵」の詞書編者と絵の特質を解析し、覚鑿や慈円の著作との関係、絵に見る様式上の年代観を論ずる第一章、現在知られている摸本7点のうち、原本と同じ構成を有する唯一の作例である神宮文庫摸本の検討から原本の伝来と摸本の成立を追う第二章、完全な剃髪姿の尼公の描写に着目し、剃り跡を強調するこの表現が変成男子による往生を表すこと、尼削ぎから剃髪へと至った貴族女性の事例を挙げ本作の制作事情を掘り下

げる第三章からなる。第一部の眼目は、詞書のうち「阿字効能」について、従来部分的な典拠としか指摘されていなかった覚鑿上人の『阿字観』との関係を、前者が後者の読み下しとでもいうべきものであることを叡山文庫の写本を比較資料とすることで明らかにしたことにある。成原氏はまた、阿字観と観想念仏を合わせ説く詞書の構成が慈円の『阿字観』に共通することや、諸所に読み手に対する丁寧な語りかけが見られることを指摘し、編者と詞書の読み手である女性が身近な関係にあったという推測も重ねる。第一部の論述においてさらに注目すべき議論は、青々とした剃り跡を強調する尼公の表現に対する解析である。成原氏は、同時代の物語絵の描法に通ずる「引目鉤鼻」の顔でありながら完全な剃髪の頭を露わにしたこの尼公は、女性らしさから隔たる意味が付与されているとし、変成男子による往生を願い、当時の貴族層の諸行往生の思想に基づき清浄な境地に至るために、妻または母の立場にある女性が自身の祈願を叶えるべく制作を発願したと推察する。

第二部「平家納経」見返絵研究は、「平家納経」見返絵の主題選択と図様の分析を十一世紀から十四世紀の制作とされる他の法華経経意絵73作例と比較検討し、「平家納経」勸持品、提婆達多品（提婆品）、薬王菩薩本事品（薬王品）、妙莊嚴本事品（嚴王品）の四巻には、女性の信仰や往生・成仏に対する配慮が窺えることを明らかにする第四章、装束や髪的美しさを強調した在俗の女性信仰者が描かれる薬王品と嚴王品見返絵が、経文を超えて女性の身のままの往生を表現しており、美しい装束を身にまとい豊かな黒髪をたゆたわせる理想的な貴族女性像の描写に平家の女性もまた貴族社会の一員として相応であるという認識、主張が託されていると論ずる第五章からなる。資料として付された「平安・鎌倉時代法華経経意絵比較一覧表」は、73点の法華経経意絵と「平家納経」を対象に法華経二十八品および無量義経、観普賢経の経意図様を表にまとめたもので、定型図様、定型ではないが経文に由来する図様、経文からのズレを示す図様といった各作例の特質が一覧できる労作である。成原氏は、経文からのズレを顕著に示す薬王品、嚴王品でのあたかも物語絵の一場面を見るかのような華やかで世俗的な見返絵に積極的な意義を見出し、そこには若年の女性の身体を通して変成男子を前提としない女性の身のままの往生が表わされ、しかも女性が貴族の理想的女性として表現されているとして、経文には還元できないこうした独自の表現が成立したのは、清盛の娘たちが平家と上流貴族との間を婚姻によってとりもつ存在であったことと深く関わっているのではないかと、女性の身のままの往生は、必ずしも往生への祈願だけに基づいて生み出されたわけではなく、現世的な祈願とも連動して形象化されるに至ったのではないかと論ずる。

第三部（第六章～第八章）「当麻曼荼羅縁起絵巻」研究は、横佩大臣の娘が阿弥陀（化尼）や観音（化女）とともに蓮糸で浄土曼荼羅を織り上げ往生するという当麻曼荼羅の由来を物語る当麻曼荼羅縁起の現存最古の絵画化作例である「当麻曼荼羅縁起絵巻」について、これに遅れる掛幅本作例とも比較しつつ画面を詳細に分析し、その制作意図を論ずるものである。論の組み立ては、下巻での織り上げられた当麻曼荼羅が懸架される場が当麻寺の曼荼羅堂ではなく私的信仰空間であることを明らかにした第六章、女性たちの製糸や染糸の手仕事が、曼荼羅の作成に向けられることを以って、日常のそれとは語り変えられ差異化され、女性自らの祈願を実現するものとして描き出されていること、曼荼羅を作る過程が当麻の地に結びついていないことなど、本絵巻が当麻曼荼羅の縁起を説くと同時に転写本制作を喚起する語りとして機能し

たと推論する第七章、本絵巻と「華嚴宗祖師伝絵巻」「頼焼阿弥陀縁起絵巻」を女性の手仕事、女性と僧侶の関係、往生の表現、信仰の場と信仰者の表現などの点で比較し、絵が鑑賞者に訴えかけている内容や鑑賞者を導こうとする方向性が異なっていることを明らかにする第八章からなる。「当麻曼荼羅縁起絵巻」については、1979年に佐伯英里子氏によって証空など浄土宗西山派による当麻曼荼羅の流布と関連する制作であり、当麻曼荼羅堂厨子扉寄進名に九条家ゆかりの女性の戒名が複数見られることから当麻曼荼羅堂厨子扉の寄進に次ぐ作善として発願したと論じられており、制作背景に関する議論は美術史学においてはその後、新たな検討がなされることがなかった。成原氏の考察は、西山派の関与を想定する点では佐伯氏の見解を継承するものの、絵巻中で当麻曼荼羅が懸架される場が当麻寺の曼荼羅堂ではなく、貴族邸宅内の信仰空間であること、女性たちの手仕事で曼荼羅を作ることを焦点化していることに注目し、本絵巻が語り出しているのは曼荼羅を当麻の地に限らずとも女性が手ずから作り、それを私的空間に懸架して礼拝することで、曼荼羅を媒介とした往生の祈願が果たされるということであるとする。すなわち本絵巻は当麻寺に寄進されたものではなく、西山派がすすめる曼荼羅転写本制作への女性の参与を促すものであったとの新たな解釈を提示した。

終章では、成原氏自身の研究の観点や方法の変遷を辿り、当初の研究成果から女性表象の新たな捉え方による発展的考察へと進んだ経緯を述べ、第一章から第八章での議論をあらためて確認し、本論文が絵画と女性の信仰の関わりの中で、詳らかにされてこなかった面を浮かび上がらせる、すなわち絵には家族を含む人的関係の維持ないし形成や、作善への導きといった機能が期待されたこと、また絵が女性の祈願のみによってではなく、女性と家族の関係および家における女性の役割と密着した祈願や、私的空間での女性への布教と関連し生み出されたことを論ずるものであることを述べる。

成原有貴氏の学位請求論文は、作品の徹底した観察による情報の取得とその解釈など、テキスト内部の分析が優れ、新たな知見が得られている。「当麻曼荼羅縁起絵巻」下巻での当麻曼荼羅懸架の場が貴族邸宅内の信仰空間であること、「阿字義絵」の尼公が青々とした剃り跡を強調する完全な剃髪姿であることなど、描かれたものを丁寧に観察し、特質を見出すことから、作品の根幹にかかわる制作意図や制作主体者、受容者の推察へと論を進める考察の展開は、ここに取り上げた三作品の研究に新たな頁を開くものである。また、「平家納経」を含め計74点の法華経経意絵の比較一覧表の作成は、作品に即して図様を精緻に分析し分類することで、法華経経意絵の定型や時代の傾向などが浮かび上がっており、今後の法華経経意絵研究を活性化すると想像される。「平家納経」の考察での、経文と描かれたイメージとの関係をズレという観点から照射する分析の手法は有効であり、往生の祈願だけではない現世的祈願も連動しているとの指摘は、「平家納経」の新たな解釈の提示となっている。また「阿字義絵」の生々しい剃り跡という貴族の女性の身体性まで感じさせる表現に着目し、このリアリティが桂姿の尼の貴族女性に「変成男子」を重ね合わせた、いわば「変身」の表現となるという図像解釈も説得力がある。総じて、各作品の個々の場面の図像分析は他の作品との詳細な比較をともなうなされており、新たな知見も少なくない。このような画面の観察の豊かさに比べ、例えば『法華経』と女性の信仰というベースラインへの理解、覚鑿の思想や教学、特に密教としての「即

身成仏・三密加持」と浄土教の「浄土往生・念仏行」といった教説の融合など、宗教性についての理解は、今後さらに深めていく必要があるだろう。

それぞれの作例で「成立における女性の関与」が示され、その議論が新たな作品解釈へと結ばれていく本論文の清新な議論は、中世日本絵画史研究に裨益するところ大である。絵画に見る女性の信仰について、思想的検討をさらに深め、解釈の妥当性をいっそう確保していくことを期待したい。

以上を勘案して、審査担当者一同は、本論文が博士（美術史）の学位に相応しいものと認めた。

論文審査主査 佐野みどり 教授  
島尾新 教授  
松波直弘 准教授